



# 現代日本語の助詞「たり」の非例示用法—日本語教育への応用に関する検討—

陳, 玉

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8799号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490024>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文要旨

氏 名 陳 玉  
専 攻 グローバル文化学  
指導教員氏名 齊藤 美穂

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

現代日本語の助詞「たり」の非例示用法  
—日本語教育への応用に関する検討—

### 論文要旨

現代日本語の助詞「たり」は形式的には並列使用と単独使用に分けられ、意味的には例示用法と非例示用法に分けられる。並列使用は基本的にすべて例示用法に該当するが、単独使用は例示用法と非例示用法の場合がある。本研究では、「たり」の使用例を以下のように分類する。

#### 並列使用の例示用法

要素を2つ以上並べ、ほかの同類要素も暗示する用法

#### 単独使用の例示用法

要素を1つのみ提示し、ほかの同類要素も暗示する用法

#### 単独使用の非例示用法

要素を1つのみ提示し、ほかの同類要素を暗示しない用法

日本語教育においては、「～たり～たり」の形を標準としており、並列使用に比べて単独使用、また例示用法に比べて非例示用法はあまり重要視されていない傾向にある。しかし、非例示用法には、断定を避け、発話を軽くする機能があると指摘されており、コミュニケーションにおいて効果的なストラテジーとして日本語学習者に紹介する必要があると考える。そこで、本研究では、日本語教育への応用を目指して、「たり」の非例示用法について考察した。

本論文は7章からなる。以下に各章の概要を示す。

第1章では、序論として、日本語の「ぼかし」コミュニケーションとヘッジ表現について述べ、日本語教育での指導が不十分であることを論じた。そのうえで、「たり」を研究対象として取り上げ、日本語教育では「たり」の非例示用法が重要視されていない問題を提起し、研究目的を示した。

第2章では、歴史的変化と現代の用法に分けて先行研究の知見をまとめたうえで、残された課題について述べた。先行研究に残された課題としては、例示用法と非例示用法の使用傾向および、非例示用法の使用文脈と使用効果について十分に調査されていないことを指摘した。

第3章では、会話資料調査、日本語母語話者印象評定、日本語教科書調査を行うための研究方法について検討した。会話資料調査の部分では、話し言葉コーパスとドラマのシナリオの特徴を述べ、「たり」の用例の分類基準を示した。日本語母語話者印象評定の部分では、調査対象と調査手法の選定について述べた。日本語教科書調査の部分では、日本語の会話教科書を調査対象とすべき根拠について述べた。

第4章では、具体的な会話資料調査で用いる『日本語日常会話コーパス』と連続テレビドラマの情

報を示したあと、それぞれのデータによる調査結果を報告した。具体的には、データごとに並列・単独使用と、例示・非例示用法の分布を示した。また、単独使用における例示用法と非例示用法に形式の点で違いがあるのかを調査するため、「たり」の前接部、出現形式、後接部に分けて、それぞれの特徴を分析した。次に、『日本語日常会話コーパス』のデータを用いて、世代差を調査した。最後に、「可能性に対する見積り」と「属性の前面化」という二つの機能に分けて非例示用法の使用文脈を整理し、文脈ごとの特徴と使用効果について述べた。

第5章では、日本語母語話者印象評定を実施した。予備調査では、質問紙の内容について検討を行った。本調査では、SD法で11の形容詞項目を用いて、日本語母語話者に対して7件法で印象評定を実施した。「依頼」「プライベートな質問」「自己開示」「謝罪」「他者評価」の5つの場面における非例示用法の会話を作成し、それぞれ「たり」の有無による印象の違い、世代による印象の違い、性別による印象の違いについて考察した。

第6章では、日本語会話教科書における「たり」の扱いを調査した。まず、レベル別に分けて各教科書における「たり」の出現数を示した。そして非例示用法を扱っている教科書の有無を調査した。続いて、第4章の使用文脈の記述を参考に、教科書の会話文に出現する非例示用法はどのようなものなのかを分析した。最後に、非例示用法に対する説明の有無とその内容の妥当性について分析した。

第7章では、まず会話資料調査、日本語母語話者印象評定、日本語教科書調査の結果をまとめた。そのうえで、3つの調査で得た結果を統合化し、具体的にどのような内容をどのように取り入れるのかという観点から、コミュニケーションのための日本語教育への提案を行った。最後に今後の課題について述べた。

## 論文審査の結果の要旨

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                            |     |       |                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----|-------|----------------------------------------|
| 氏 名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 陳 玉                                                                        |     |       |                                        |
| 論文題目                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 現代日本語の助詞「たり」の非例示用法<br>ー日本語教育への応用に関する検討ー                                    |     |       |                                        |
| 判 定                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 合 格 ・ 不 合 格                                                                |     |       |                                        |
| 論文チェックソフトによる確認                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | <input checked="" type="checkbox"/> 確認<br><input type="checkbox"/> 未確認 理由： |     |       |                                        |
| 審<br>査<br>委<br>員                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 区 分                                                                        | 職 名 | 氏 名   | 論文審査結果<br>について                         |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 委 員 長                                                                      | 教授  | 田中 順子 | <input checked="" type="checkbox"/> 確認 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 委 員                                                                        | 准教授 | 齊藤 美穂 | <input checked="" type="checkbox"/> 確認 |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 委 員                                                                        | 教授  | 康 敏   | <input checked="" type="checkbox"/> 確認 |
| 要 旨                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                                            |     |       |                                        |
| <p>本研究は、現代日本語の並列助詞「たり」について、日本語教育における扱いと使用実態の間にずれを感じた筆者が、実態調査や印象評定、現行の日本語教科書の調査結果をもとに、日本語教育への導入のありかたを検討した論考であり、全 7 章から成る。まず第 1 章で研究の背景と目的を示し、第 2 章で先行研究における「たり」に関する知見を整理し、第 3 章で研究方法を提示している。続く第 4 章から第 6 章では、それぞれ会話資料調査、日本語母語話者印象評定、日本語会話教科書調査の結果を述べている。最後に第 7 章で、3 つの調査結果を総合化し、これにもとづいた日本語教育への提案を行っている。</p> <p>本研究では、先行研究の記述及び申請者自身の修士論文の結果をもとに、まず形式的な側面から、「たり」を用いて複数の要素を並べる「並列使用」と、1 つの要素の提示にとどまる「単独使用」に分ける。そして「単独使用」を、他の要素あるいは集合を想起させる「例示用法」と、これらを想起させない「非例示用法」に分ける。</p> <p>筆者はまず会話資料調査において、『日本語日常会話コーパス』（以下『会話コーパス』）と、連続ドラマのシナリオを資料として分析を行い、日本語教科書で優先的に示される「並列使用」「例</p> |                                                                            |     |       |                                        |

示用法」と同程度に、「単独使用」の「非例示用法」が用いられていることを示した。そのうえで「たり」の前接部、出現形式、後接部に分けて、用法別の特徴を分析し、部分的ではあるが用法による違いを示した。また、『会話コーパス』を用いて世代差を調査し、「非例示用法」が10代から80代までの幅広い年代層の話者に用いられており、先行研究で指摘されていたような「若者言葉」の範疇を超えていることを明らかにした。さらに、「非例示用法」のデータをもとに、「たり」の機能を「可能性に対する見積もり」と「属性の前面化」という2つの機能に分けてその使用文脈を整理し、文脈ごとの特徴と「ヘッジ」としての使用効果を明らかにした。

次に、例示用法の「たり」の使用が聞き手に悪い印象を与える可能性について検証するため、上記調査の結果をもとに非例示用法の「たり」が用いられる場面を5つ設定してモデル会話を作り、性別・年代別の6グループ各50名、計300名を対象に、SD法による日本語母語話者印象評定を行った。その結果、4つの場面で年代を問わず「たり」を使用しない文の方が好感度が高いものの、若年層では「依頼」や「プライベートな質問」場面では他の年代よりも「たり」の使用を好むことが示唆された。

最後の調査として、過去10年間（2023年時点）に刊行された比較的新しい日本語会話の教科書における「たり」の扱いを調べ、標準的な形式・用法として導入される「並列使用」の「例示用法」に対し、「単独使用」の紹介自体が少ないこと、またこれが導入される際には「非例示用法」が優先的に導入されていることを確認した。さらに例文として導入されたとしても、例示・非例示の区別がなされないままの説明になっている点、「友達言葉」のように使用相手を限定した書き方になっている点など、問題点を指摘した。

日本語教育に限らず外国語教育においては、何をどう導入するかが常に議論になる。本研究は、用例の分類における客観性の担保や、印象評定調査の設計及び結果として得られたデータの統計処理等に不足点は認められるものの、異なる複数のデータに基づいて調査を積み重ね、「並列使用」による「例示用法」が標準とされてきた「たり」について、「非例示用法」の使用割合の高さや使用話者の幅広さを示し、その場面ごとのコミュニケーション上の効果を分析し、指導の必要性和有益性を主張するにとどまらず、指導する用法間の優先順位を示し、日本語教育でどのように取り入れるべきか具体的な提案を行っている。またその使用によって学習者が不利益を被る懸念を排除するため日本語母語話者の印象評定による検証も行っており、広く外国語教育において何をどのように導入するかの検討プロセスを示す事例としても、非常に示唆に富む有益なものであると考えられる。

業績としては、学術論文（査読付き）2編、口頭発表2件（海外・国内各1）があり、さらに1件の国内学会での口頭発表（令和6年3月9日開催）が採択済みである。

以上のように、本研究は「例示」を表すとされる現代日本語の並列助詞「たり」について、その「非例示用法」に焦点を当てて研究したものであり、その使用実態と現行の日本語教育での扱われ方とのずれに関して重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の陳玉は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。